私の保育

松井智枝子

私が保育者として、保育にたずさわるようになってから、ようやく一年目になろうとしています。

四月当初、学校を卒業したばかりの頃は、何もかもわからず、月日の流れがとても遅く感じられました。毎日、四季おりおりの風景が描かれたカレンダーをめくって見ながら、「こんな日がめぐってくるのかしら。」と本気で思った程です。けれども現在、そのカレンダーもめくり終え、一年間の経験や思い出を子どもたちといっしょにまとめる時期に入り一日一日がとても早く過ぎ去っていってしまいます。やらなくてはならないこと、やりたいこと、やっておくべきだったことなどが、学年末のぎりぎりの所へきて、山のように出てきているのです。

『保育する立場の現場に入る以前、まだ学校で専門的な知識を学んでいた頃、自分なりの保育を描き持っていました。それは、子どもたちの気持ちになって考えてあげられるような保育者でありたいということ、そして他人のことを思いやるやさしい心と物事に対して感動できる感性、子どもたちの間から芽ばえたものを大切にした自発性とを、養ない育ててあげられるような保育内容を持ちたいということでした。とはいえそれらのことは、あまりにも漠然とした抽象的なもので、保育の実際を踏まえていない私の、理想にすぎなかったのです。

私の勤務する保育園は、長野県下でも数少ない自由保育の形態をとっています。

しかし、私の学んできたものは、学級のほぼ全員を同一レベルと仮定し、幼児が保育者の指導のもとに、同一内容で一定時間に指導されるという、保育者中心の性格を持つ、一斉保育を主流とした指導案や実習ばかりでしたので、一体自由保育をやっていかれるのかどうかとても不安でした。

それでも、もともと楽天的なため、さほど思い悩むこともなく、幼児の最善の成長を思い一生懸命努力すれば、どのような形態の保育内容におかれてもなんとかなるだろうとも思っていました。

今年度の始め、年中児と年少児の混合二十四名のクラス担任と決まった時には、保母になったという実感が湧いてきて、頭ではすでに子どもたちと接している自分の姿を描いていました。

入園式前までの用品の整理や、子どもたちのロッカーのネーム貼り、名簿の作成など毎日が期待に満ちていて、今思い起こしてみるとこの頃が一番心のはずんでいたときのように思われます。

入園式もとどこおりなく行なわれ、いよいよ保育開始となりました。子どもたちも、私も胸をふくらませ待ち続けた日がやってきました。ところが、いざ二十四名の子どもたちと接してみると、私の頭に描いていたことなど、全く夢のようなことでした。すっかり私は、失望してしまいました。もちろん、そうなったのは、私ばかりでなく、子どもたちも同じだったと思います。あこがれていたはずの園生活が、実は親もとを離れたとても心細いものに映ったのでしょう。母親にとりすがって離れない子、泣き出す子、用便がひとりでできずにもじもじしている子など、様々で二十四名が、それぞれ異なったかたちで、不安な気持ちをあらわしていました。

そのような子どもたちを、私は沈んでいる間もなく、受けとめてあげて不安をとり除かなくてはなりません。でも表面で起っていることに対応することしかできずに、とても子どもたちの気持ちを考える余裕などありませんでした。毎日がそのようなことの繰り返しでした。そんな中で特に、何も言わずに泣き続ける子や突然大声で泣き出し手がつけられず私をおろおろさせる子の気持ちなど少しも、推し測れず閉口してしまい、ただ泣きやませることのみ先行して、降園の時刻の迫る時など、背負っておやつを配ったこともありました。そんなふうですから、降園の準備もおおわらわです。しか

し、私の手際の悪さに、四月の入園当初ということも手伝って、他のクラスより早めに始めても、園庭に出終えるのは一番最後という状態でした。他のクラスの先生のてきぱきとした誘導をみるにつけ自分の力の無さに、苛立たしさを感じるのですがどうにもうまくゆきません。それでも、夢中で取りくんでいたその頃は、疲労とともに、わずかながら充実感があったように思います。

私も子どもたちも、園生活のリズムに慣れそして落ちつき始めたころになると、子どもたちのあいだでは、徐々に自分を出しはじめて、いたずらに感情のいきちがいが起りだし、それと同時に悪い芽も出はじめてきました。それらのことは、自主性の現われとして喜ばしいことのはずなのに、私は、「今叱らなければ、叱っておかなくては。」と思ってしまい長いめでみてあげることができず、つい叱ってしまうことが多かったのです。

叱り方については、家庭内でいえば父親のような、ピシッとした一言で済ませられるようなふうにできたらと思っていました。私も子どもたちも、お互いすっきりした気持ちでわかり合えると思うのです。

ところが実際は、自分が考えているほどうまくいかず、物を投げつけたり、けんかをしたときなど、子どもたちと顔が触れ合うような状態で、いちいちくどくどと説明を並べ、子どもにいい聞かせているばかりで、そのうちに、自分でも何を言っているのかわからない、なんとも情けない気持ちになってしまうのです。もちろん子どもも、私の話などうわの空で、しっかり手をにぎりしめた私の顔を見つめているだけという中途半ばなままで終わってしまいます。

悪い芽を摘むのにはなんの役にも立たず、ただうるさいことを言う先生だと子どもたちが、思うだけにしかなりませんでした。

私の言うことを、素直に聞いてくれることばかり望んでいました。それが、始めのうちはだいぶうまくすすんでいたのですが、そのうちに、目もあてられないところまでいってしまったのです。ある程度型にはめようとしていたために、その中に入り込めた子はなんら、心に支障をきたさなかったようですが、はみ出てしまった子は、とても乱暴な口の利き方になり、私のことばなど聞かなくなってしまい、私も何も言えないようになるという悪循環の繰り返しで、最も怖れていた放任状態になってしまいました。

技術も経験もないこのような私が子どもたちに与える影響

を思うと、不安がつのるばかりでした。

そんなあるとき、某幼稚園で公開保育が行なわれ、私も参加する機会を与えていただきました。そこで見た子どもたちの生き生きとした表情と、保育する先生のにこやかで軽快な動きは、とても印象的でした。頭から足の先まで神経がゆきわたっているというのは、ちょうどこのような状態をさすのでしょう。

たえまなく子どもたちと接していて、そしてどのグループにも必ず触れているのです。注意を与える時も、適切なことばで、ふたことくらいで済ませ、子どもたちも納得しているのです。つねに気を配り、子どもたちひとりひとりが満足できるような保育。目をみはるようでした。

少しでもいい、私もこのような保育者に近づくことができたならと、園に帰ってから思いおこしてみると、にこやかな微笑と快い動きが自然に浮び上がってきました。そして、保育者として何もできなかった私にも、このことならば、毎日の心がけで、できるのではないかとおもえました。

それでも一日、二日は『にこやかでいきいきと』と心の中でつぶやきながらがんばれましたが、いつのまにか、くもった顔をしている、そんな自分に気づくのです。身の内からにじみ出るようになるためには、相当の努力が必要だとつくづくおもいました。

子どもたちの活動から目を離さないようにと、部屋の中、園庭を、くまなく見てまわります。自分のうけもちでなくとも、相互に連けいをとってみているので、あまりひどい放任状態はおこらないように思います。それでも、いたずら盛りの男の子たちは、特に心配で、なるべく居場所を確認するようにしています。そして声をかけたりするのですが、何かこわしてしまったり、けがをしたりなど、いろいろなことが起ってしまいます。一生懸命にしているつもりだけに、とても大きなショックを受けました。まだまだ力のたりなさを感じます。この次は気をつけて回ろうと、自分自身をはげまして、情熱と努力でおぎなうようにしようと思っています。

以来、自分の気持ちにも少しずつ余裕が出て、子どもたちの気持ちにも触れられるようになってきました。

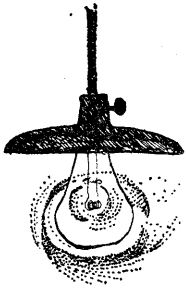
この一年間、毎日が新しい体験でした。子どもたちから、学ぶことは毎日毎日、ちがっていました。また、不注意から風邪をこじらせてしまい、健康であることが、保育者として、最も大切なことと、知りました。そして一番不安だった自由保育も、幼稚園の公開保育、講演会等、様々な勉強の機

会があり、そのおおよその型を学ぶことができ、今は吸収してきたものばかりで、消化不良をおこしています。

先日、回読した新聞の記事に、しつけについて書かれたものがありました。子どもたちは、大人のする様を見て育っていくものだと書かれていました。良いところも悪いところも。なるほどと身にしみる思いでした。あまりにあたりまえすぎて、見すごしていたことです。子どもたちのしつけについて悩んでばかりいないで、まず自分自身を、みがかなくてはならないのです。他人の悪いところを指摘することはたやすいですが、自分の欠点を改めることは、楽ではありません。人間として大切なことをたえず身につけるよう努力しながら、学び体験したことをもとに、本当の自分の保育をみつけたいと思います。

何も子どもたちに与えてあげられなかった私ですが、子どもたちは、したってくれ、また私がとまどっている間にもどんどん成長してゆきました。半分放任状態にまでいってしまいそうになった子どもたちも、園長先生がふだんおっしゃっていられる「子どもたちのことを認めてあげることが、保育する中でとても大切なこと。」という言葉を念頭におき保育してきたことにより、近ごろは、だいぶおちつきがでてきたように思います。

あとわずかしか残された期間はありませんが、基本的生活習慣をこまめにみてあげ、ひとりひとりが年齢に応じた段階までは、ひとりでもできるようにして、進級させてあげたいと考えています。私が真剣にとりくめば、子どもたちの心につたわるものがあるはずだと思うのです。

このように保育者としてもまた社会人としても、未熟な私が、ここまでこれたのも、なにかと御指導くださった、園長先生はじめ周囲の先生方のおかげだと思っています。

（長野・上田芙蓉保育園）